F 6　食物教育の史的研究　－戦時下における社会教育面からの考察－

東京家政学院大 ○江原絢子　武蔵野女大短大　石川寛子

目的　演者らは、すでに高等女学校における食物教育の史的研究として、明治期から昭和前半期にかけて発行された高等女学校用家事教科書を資料とし、その内容分析を行い、逐次、時代を追って報告してきた。そしてその中で第二次大戦下において発行された家事教科書は、明治期から昭和初期までのものと、その内容・構成に著しい相異があることを明らかにした。そこで今回は、同時期に於ける社会教育面での食物教育を考察するために、この期に於て発行された各種資料にみられる教育内容を分析し、戦時下の学校教育と社会教育との内容特性について把握することを目的とした。

方法　昭和１８年から２０年に発行された婦人雑誌、各地域で発行された食物・食生活指針、地域講習会、展示会など各種の社会教育資料を用いてその食物記事内容を調査分析し、その特徴について考察した。

結果　資料の構成及び内容は、学校教育に於ける同期の資料と同様に、各資料とも具体的調理記事の記載が中心となっていた。記載食品としては、とうもろこし、じゃがいも、かぼちゃ、さつまいもなどエネルギー源となるものが多く、野菜としては、玉葱、キャベツ、人参が多出した一方、動物性食品としては、しらす干し、干鱈、鰯などのほか、いなごなどもみられた。調理上の共通した特徴としては、油を使用した、特に「炒め物」が多かった。食物摂取の姿勢は、栄養摂取とそれに伴う合理性、経済性に向けられており、それを追求する形として、計量・数量化など科学的な面を強調する傾向の強いものと時局を乗り切ることに重点を置いたものとがみられた。